

カニ類

① 名古屋市におけるカニ類の概況

名古屋市で今まで観察されたカニは、12科43種である。淡水産サワガニ以外は、潮の干満の影響を受ける名古屋港南部のふ頭海岸（潮見・稲永・汐止・空見・金城）や市内を流れる河川の河口・河口干潟・ヨシ原に生息していた。

ふ頭海岸に生息するカニ

ふ頭岸壁下の岩・石の間に多く生息するイソガニ1種と、海底に生息しているカニは次の17種である。サメハダヘイケガニ、アミメキンセンガニ、ナナトゲコブシ、イッカククモガニ、イボイチョウガニ、ガザミ、シマアシイシガニ、ヒメガザミ、イシガニ、フタホシイシガニ、チチュウカイミドリガニ、ケブカエンコウガニ、マルバガニ、シワオウギガニ、シワオウギダマシ、トリウミアカイソモドキ、オオヨコナガピンノ。

海底に生息するカニは抱卵盛期に入ると、浅瀬に移動する。ふ頭に近づくものもあり観察が容易になる。

河口、河口干潟、ヨシ原、カキ礁や転石の下に生息するカニ

河口、河口干潟、ヨシ原、カキ礁や転石の下に生息するカニは次の24種である。

河口にはマメコブシガニ、オウギガニ、モクズガニ、オオシロピンノ。

河口干潟にはハクセンシオマネキ、コメツキガニ、チゴガニ、オサガニ、ヤマトオサガニ、アリアケモドキ。

カキ礁や転石の下にはケフサイソガニ、ヒメケフサイソガニ、ヒライソガニ、タカノケフサイソガニ。

ヨシ原にはアカテガニ、カクベンケイガニ、ユビアカベンケイガニ、クロベンケイガニ、フタバカクガニ、クシテガニ、ベンケイガニ、ハマガニ、アシハラガニ、ウモレベンケイガニ。

市内を流れる7つの河川の河口堤防は、コンクリートの垂直岸壁となっている。河口に干潟・ヨシ原が発達していない川が多い。河口、河口干潟、ヨシ原はカニの産卵や稚ガニの生育場所と親ガニの生息場所として重要な役割をしている。

庄内川は規模の大きい川で河口・下流に干潟・ヨシ原が発達している。河口干潟は藤前干潟へと広がっている。干潟周辺にカキ礁や転石がある。

次に規模の大きい天白川は上・中流域の水源となる丘陵や池が住宅団地となった。河口は、潮見ふ頭により、河口の自然環境が変化し、河口干潟・ヨシ原の減少で、カニの種類・個体数が減少した。

なお、ケフサイソガニは、形態的に区別し得る2型が存在することがわかり、ケフサイソガニとタカノケフサイソガニに分けられることになった（高野，2005）。2005年以前の標本は、区別しない。

このほか、ミナトオウギガニ（外来種）が中川運河で採集されている（木村妙ほか，2007）。

守山区東谷山のカニ

サワガニが生息していた。

② 名古屋市における絶滅危惧種の概況

今回の調査の結果、絶滅危惧ⅠB類 (EN) 2種、絶滅危惧Ⅱ類 (VU) 4種、準絶滅危惧 (NT) 4種、計10種がリストに掲載された。

サメハダヘイケガニは潮見ふ頭南海岸、金城ふ頭南海岸の海底に分布しており、長期にわたり継続観察をすることができた。結果、減少傾向にあることがわかった。このカニは海底の汚れの影響を受け易い砂泥底に生息している。大型船舶の出入りが多く、汚れを受け易い場所である。生息場所の関係から、環境が更に悪化すれば消滅の危険性がある。清掃活動によりゴミ・油を回収し、海水の水質を浄化回復させることが必要である。

河口干潟に生息しているカニはスナガニ科のカニが多い。かつて庄内川・天白川の河口干潟にハクセンシオマネキ・コメツキガニ・チゴガニの大きい集団を観察することができた。両河川の河口にふ頭ができ、河口護岸工事が行われて干潟・ヨシ原が減少し、カニの個体数が激減した。庄内川の現状の自然環境の維持・管理が必要である。藤前干潟については、残された貴重な自然の保全が図られている(ラムサール条約登録)。河口は、モクズガニの産卵場所となっているが、稲永ふ頭・汐止ふ頭・空見ふ頭によって河口面積狭く、海水の汚れの影響が考えられる。

ヨシ原に生息しているカニはアカテガニ・クシテガニ・ユビアカベンケイガニ・ウモレベンケイガニなど、ベンケイガニ亜科のカニが多く、希少カニが含まれている。

市街化により、各河川の堤防・河口をコンクリートの垂直岸壁とするための大規模工事が行われた。干潟・ヨシ原は減少し、カニの種類・個体数が減少した。開発を免がれた背割堤干潟・ヨシ原に希少なカニが生息している。

サワガニは守山区東谷山に生息しているが、市街化により丘陵地開発が進み、生息環境が変化し、個体数が減少した。生息地は限られており分散能力が低いので消滅の危険性大である。近年、生息を確認していないが、生息しているという報告はある。東谷山の溪流の自然植生と水理の保全などが必要である。

(執筆者 天野 勲)

③ レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各カニ類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

なお、この記載については、平成26年10月現在のデータに基づくものである。

【掲載種の解説（カニ類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目及び科の範囲と種の配列は原則として「日本産かに類の分類目録」（三宅，1998）に準拠した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として「日本産かに類の分類目録」（三宅，1998）に準拠した。その後、新しい取扱いがある場合は、それに従った。

【カテゴリー】

対象種の名古屋市におけるカテゴリーを各頁右上の枠内に記述した。参考として「第三次レッドリスト レッドリストあいち 2015」（愛知県，2015）の愛知県での評価区分、及び「レッドデータブック 2014 -絶滅のおそれのある野生生物- 7 その他無脊椎動物（クモ形類・甲殻類等）」（環境省，2014）の全国でのカテゴリーも併記した。

【選定理由】

対象種が名古屋市版レッドデータブック掲載種として選定された理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述し、生態写真を掲載した。

【分布の概要】

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が現地調査によって確認された地域について、各区（地先を含む）ごとに着色して市内分布図として掲載した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息環境及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【関連文献】

対象種の関連する文献のうち代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

カニ類 <十脚目 スナガニ科>

ハクセンシオマネキ *Uca (Celuca) lactea lactea* (De Haan)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	調査対象外
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

名古屋市では、庄内川河口干潟・背割堤干潟や天白川河口干潟に生息していた。庄内川の河口には、稲永ふ頭・汐止ふ頭が出来て干潟の面積が狭くなり、個体数が減少した。さらに砂底・砂泥底干潟の減少で現在はハクセンシオマネキの生息を確認できない。天白川の河口干潟は、潮見ふ頭が出来、干潟・ヨシ原が減少した。上・中流域の水源となっていた丘陵地・池の多くが住宅団地となり、水質の汚濁などによりハクセンシオマネキの姿は見られなくなった。

【形態】

雄・雌ともに甲長 12mm 位、甲幅 18mm 位。鋏脚は、雄は左右著しい相違。大鋏の掌部はやや扁平し、表面白色（白扇）。雌は左右とも小型で相称である。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川河口・背割堤の干潟では 2002 年と 2008 年～2012 年まで、生息を確認した。天白川河口は 2000 年に生息を確認している。現在は消滅したものと思われる。

【県内の分布】

知多半島伊勢湾側にある南知多町内海、知多市日長の干潟に生息していた。

【国内の分布】

伊勢湾が北限とされているが、下田市の大賀茂川河口、三浦半島にも生息している。南は九州まで分布。日本列島での分布範囲は狭い。

【世界の分布】

韓国、台湾、ホンコンまで分布。

【生息地の環境／生態的特性】

砂泥底のやや硬い干潟を好み、深さ 5～20cm 巣穴を掘って生活している。干潮時巣穴からでて集団で活動するウェイビング行動は 6 月中旬から 8 月下旬の繁殖期に見られる。

【現在の生息状況／減少の要因】

庄内川河口・背割堤の砂底・砂泥底干潟に生息していたが、干潟面積が狭くなり、個体数が減少。2013 年以後、生息を確認していない。河川により運ばれる砂土量が減少し、生息場所が消失。天白川河口は 2001 年以後、生息を確認していない。

【保全上の留意点】

河川の上流に横断構造物を建設すると、川水によって運ばれる土砂量が減少し、ハクセンシオマネキの生息場所が減少する。河口干潟・ヨシ原は稚ガニの生育場所となっている。庄内川の現状の自然環境が維持管理されることが必要。

【特記事項】

藤前干潟は大都市に残された貴重な自然としてラムサール条約に登録され、保全が図られている。

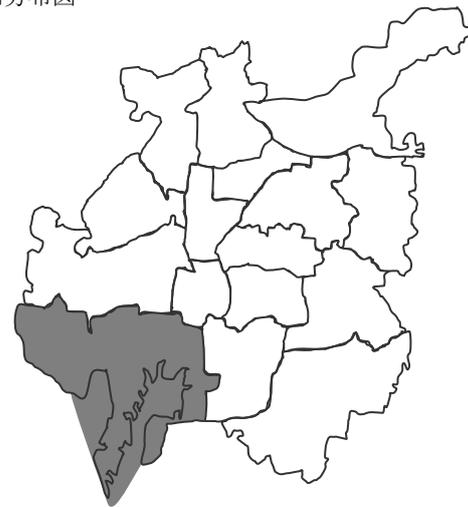
【関連文献】

- 天野 勲, 2010. 生物から見た名古屋の自然, p.98. 名古屋市.
 天野 勲, 2010. レッドデータブックなごや 2010 -2004 年版補遺-, p.175. 名古屋市.
 伊東 円, 2004. 静岡県下田市大賀茂川に生息するシオマネキ類について. 日本甲殻学会第 42 回全国大会報, p.36.
 伊東 円, 2011. 静岡県内でのシオマネキ類の生息状況. 日本甲殻学会第 49 回大会報, p.44.
 大阪市立自然史博物館・大阪自然史センター (編), 2008. 干潟を考える 干潟を遊ぶ, p.91. 東海大学出版会, 秦野.
 水産庁 (編), 1998. 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック, pp.3-23. (社)日本水産資源保護協会, 東京.
 和田恵次, 2000. 干潟の自然史・砂と泥に生きる動物たち, pp.18-19,21,59,64,66,96,102-103. 京都大学学術出版会, 京都.
 (執筆者 天野 勲)



ハクセンシオマネキ
港区庄内川河口背割堤干潟、2009 年 9 月 6 日、天野勲 撮影

市内分布図



カニ類 <十脚目 サワガニ科>

サワガニ *Geothelphusa dehaani* (White)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧I B類
愛知県2015	調査対象外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

山間の溪流や平地の清流に生息し、池や沼には生息しない。産卵で海に降りることもない。本種の生息地は限られており分散能力が低いので地域的に消滅を起こしやすい。市内では守山区東谷山で生息が確認されているが、東谷山周辺の丘陵地の開発、登山道工事などにより、溪流・清流が土砂で埋まったり、川水の汚濁によりサワガニは減少した。個体数が少ないので発見がむずかしい。

【形態】

雄は甲長 20mm 位、甲幅 25mm 位、甲の色彩に異変あり。東北地方は青色が多く、東海・三重は暗褐色である。二次性徴は、雄の鋏脚は、左右一方が大きくなる。第二腹肢が伸び、剛毛は長く密である。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区東谷山で 1984 年に初めて生息を確認した。

【県内の分布】

県内の山間の渓谷や平地の清流に広く分布している。

【国内の分布】

青森下北半島（北限）から本州、四国、九州、屋久島（南限）まで分布している。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

溪流・清流に生息し、池沼に生息しない。繁殖期 6 月～10 月。雌は腹部に卵を抱いて、15～20 日間孵化するまで保護する。3 年から 4 年生きる。食性は、藻類、ミミズ、ヨコエビ類、陸貝類（カワニナ）、水性昆虫、死んだセミなど。

【現在の生息状況／減少の要因】

宅地造成・道路工事などにより溪流・渓谷が土砂で埋まるなど、サワガニの生息環境が荒廃したと考えられる。天敵はイノシシ、アカショウビン、ヤマショウビン、ヤマメ、ドンコ。

【保全上の留意点】

山間の溪流の自然植生・水理の保全。平地の清流の河岸や川底をコンクリートにしないで土のままにしておく、川の上流から農薬、化学物質、有機物の流入をしないようにするなどの留意が必要である。

【特記事項】

サワガニは渓谷毎に遺伝的分化があるといわれている。肺吸虫の中間宿主として知られている。

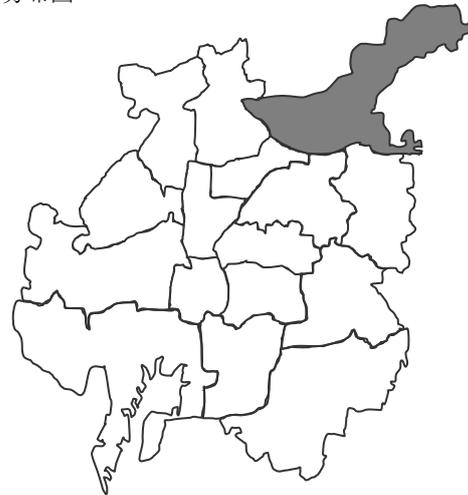
【関連文献】

- 天野 勲, 2010. レッドデータブックなごや 2010 -2004 年版補遺-, p.176. 名古屋市.
 天野 勲, 2008. 代表的な自然と生物 4 東谷山 カニ. 新修名古屋市史資料編 自然, p.507. 名古屋市.
 嶺井久勝ほか, 1992. 週刊朝日百科 動物たちの地球 69 無脊椎動物 9 サワガニ・コメツキガニほか, pp.260-261. 朝日新聞社, 東京.



サワガニ
守山区東谷山、1984 年 10 月 21 日、天野 勲 撮影

市内分布図



(執筆者 天野 勲)

カニ類 <十脚目 イワガニ科>

アカテガニ *Chiromantes haematocheir* (De Haan)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	調査対象外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

名古屋市では、庄内川河口から、最も陸深く、堤防の土手など高い所に生息するカニ。市内の河川堤防は、コンクリートの垂直壁で、這い上がることが難しいため、個体数が減少した。河口付近の干潟やヨシ原に生息するものもある。しかし、個体密度の低い種類であり、河口域・下流域の生活環境が悪化すれば消滅するものと思われる。

【形態】

雄の甲長 35mm 位、甲幅 40mm 位で、甲は四角形。雄の鋏脚は強大で鮮紅色。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川の河口から河川沿いに 5km～6km 位上流まで分布していた。個体数は多くない。

【県内の分布】

伊勢湾の木曾三川や三河湾の矢作川・豊川など大きい河川の河口部・下流域に分布。

【国内の分布】

岩手県以南（太平洋側）と秋田県以南（日本海側）に分布。

【世界の分布】

韓国、中国、台湾。

【生息地の環境／生態的特性】

堤防の土手斜面や陸上の自然林に巣穴をつくり生息する。抱卵盛期 7 月～8 月。産卵は河口です。幼ガニまではヨシ原の中で生育する。

【現在の生息状況／減少の要因】

都市化が進み、堤防がコンクリート化した。陸上の自然林もなくなったため、堤防内のヨシ原の周辺を生息場所としている。

【保全上の留意点】

河川改修の際、土の岸とその付近の植生を残すこと、河口のヨシ原を消失しないよう見守っていく。コンクリートの垂直堤防はカニが陸上への昇降ができない。堤防の傾斜を考えるべきである。

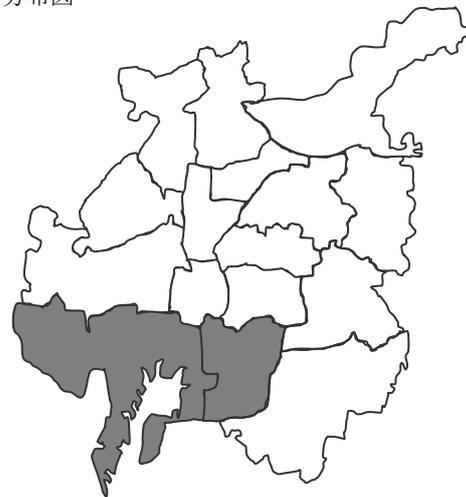
【特記事項】

赤いカニとして目立つので捕獲され易い。



アカテガニ
港区庄内川下流、2005年8月20日、天野 勲 撮影

市内分布図



【関連文献】

天野 勲, 2010. レッドデータブックなごや2010 -2004年版補遺-, p.177. 名古屋市.
馬場敬次, 1976. アニマ特集 カニの世界・海に育つ河口のカニ, pp.16-19. 平凡社, 東京.
小島太一, 2008. アカテガニの産卵における3年サイクル. 日本甲殻類学会第46回大会報, p.78.

(執筆者 天野 勲)

カニ類 <十脚目 イワガニ科>

クシテガニ *Parasesarma plicatum* (Latreille)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	調査対象外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

かつて、名古屋市内で生息が確認された産地は、庄内川河口の両岸・背割堤のヨシ原と天白川の右岸のヨシ原である。その後、庄内川左岸は大規模護岸工事と埋め立て工事で干潟やヨシ原は減少した。河口に残されたヨシ原の中で生息を確認している。右岸の背割堤は立ち入り禁止となり、干潟・ヨシ原の自然は守られた。2009年6月に立ち入りが許可され、クシテガニの生息を確認した。個体数が減少していた。天白川は上・中流域の丘陵が住宅地となり、川によって運ばれる土砂量が減少し、水質も変化した。河口近くにふ頭ができ干潟・ヨシ原が激減した。クシテガニの生息は確認できなくなった。

【形態】

雄の甲長 21mm 位、甲幅 30mm 位で四角形のカニ。鋏脚の可動指の上縁に米粒のような顆粒 6~8 個並びクシのように見える。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川河口左岸に残された干潟・ヨシ原と右岸の背割堤に生息している。

【県内の分布】

伊勢湾では、知多市新舞子鍛冶屋川河口の干潟・ヨシ原などに生息していた。三河湾の田原氏汐川河口干潟・ヨシ原などにも生息していた。

【国内の分布】

東京湾、相模湾、岡山、熊本、長崎方面に生息している。

【世界の分布】

韓国、中国、マレー半島、インド。

【生息地の環境／生態的特性】

汽水域上限まで見られ、ヨシ原の中で生息する。干潟の高い場所や川堤に穴居する。

【現在の生息状況／減少の要因】

護岸工事など開発が進み干潟・ヨシ原が減少したため、個体数が減少した。

【保全上の留意点】

河川全域と河口域の自然環境の維持・管理が必要。個体数が減少しているため現在の生活場所を保護する必要もある。

【関連文献】

天野 勲, 2010. レッドデータブックなごや2010 -2004年版補遺-, p.178. 名古屋市.
 中島徳男, 1997. 三河湾・遠州灘産海産蟹類目録, p.32.
 大阪市立自然史博物館・大阪自然史センター(編), 2008. 干潟を考える 干潟を遊ぶ, pp.33,45,105. 東海大学出版会, 秦野.
 三宅貞祥, 1998. 日本産かに類の分類目録. 原色日本大型甲殻類図鑑Ⅱ, p.181. 保育社, 大阪.

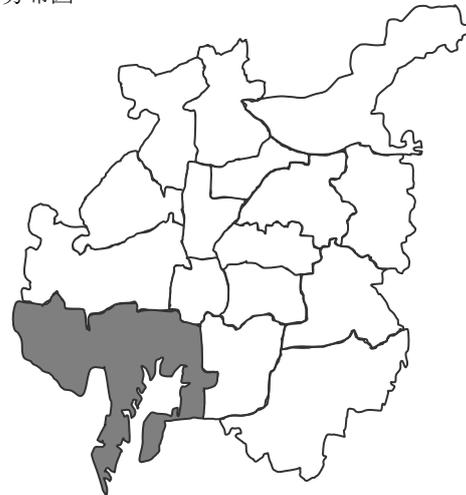


クシテガニ

港区庄内川河口背割堤ヨシ原、2009年6月10日

天野 勲 撮影

市内分布図



(執筆者 天野 勲)

カニ類 <十脚目 イワガニ科>

ユビアカベンケイガニ *Parasesarma acis* Davie

【選定理由】

名古屋市内で生息が確認された産地は、庄内川河口の両岸・背割堤のヨシ原である。その後、庄内川左岸は護岸工事と埋め立て工事で干潟やヨシ原は減少した。右岸の背割堤は立ち入り禁止となり、干潟・ヨシ原の自然は守られた。2009年6月に立ち入りが許可され、ユビアカベンケイガニの生息を確認した。個体数が減少していた。

天白川は、上・中流域の丘陵が住宅団地となり、川によって運ばれる土砂量が減少し、水質も変化した。河口にふ頭ができ、右岸の干潟・ヨシ原は激減した。ユビアカベンケイガニは生息できなくなった。

【形態】

雄の甲長 12.4mm、甲幅 15.2mm。クシテガニに似ている。小形種。鋏脚の可動指の左縁に 24~26 個の顆粒が密に列生している。鋏脚の先が赤い。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川右岸の背割堤に生息している。

【県内の分布】

三河湾の田原市汐川河口干潟、ヨシなどにも生息していた。

【国内の分布】

相模湾、三浦半島、土佐湾、福岡市多々良川水系与論島。

【世界の分布】

台湾。

【生息地の環境／生態的特性】

汽水域上限まで見られ、ヨシ原の中で生息する。干潟の高い場所や川堤に穴居する。

【現在の生息状況／減少の要因】

市の北部や東部の丘陵地にある湿地やため池は、都市化の波に洗われ、土地改良や埋め立てが進行し、生育環境が減少しているのが大きな要因になっている。

【保全上の留意点】

河川全域と河口域の自然環境の維持・管理が必要。個体数が減少しているので現在の生活場所を保護する必要もある。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	調査対象外
環境省2014	リスト外



ユビアカベンケイガニ
港区庄内川河口背割堤ヨシ原、2009年6月10日
天野 勲 撮影



【関連文献】

中島徳男, 1997. 三河湾・遠州灘産海産蟹類目録. 40pp.
 大阪市立自然史博物館・大阪自然史センター (編), 2008. 干潟を考える 干潟を遊ぶ, pp.33,46. 東海大学出版会, 秦野.
 三宅貞祥, 1998. 日本産かに類の分類目録. 原色日本大型甲殻類図鑑Ⅱ, p.181. 保育社, 大阪.

(執筆者 天野 勲)

カニ類 <十脚目 イワガニ科>

ウモレベンケイガニ *Clistocoeloma sinensis* Shen

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	調査対象外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

かつて、名古屋市内で生息が確認された産地は、庄内川河口両岸・背割堤のヨシ原と天白川河口右岸のヨシ原の2ヶ所であった。その後、庄内川左岸の堤防工事やふ頭埋め立て工事により、河口の干潟やヨシ原が減少した。背割堤の立ち入りが禁止となり、再調査ができなかった。2009年6月に立ち入りが許可されウモレベンケイガニの生息が確認された。天白川は上・中流域の丘陵が住宅地となり、川によって運ばれる土砂量が減少し、水質も変化した。河口にふ頭ができ、右岸の干潟・ヨシ原は激減した。ウモレベンケイガニは生息できなくなった。

【形態】

雄の甲長 12mm 位、甲幅 20mm 位で長方形のカニ。全身黒色で、短毛で覆われている。完全な保護色である。鋏脚の先が赤い。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川河口右岸の背割堤ヨシ原に生息している。

【県内の分布】

伊勢湾では、知多市新舞子鍛冶屋川河口干潟・ヨシ原などに生息していた。三河湾の田原市汐川の河口干潟・ヨシ原にも生息していた。

【国内の分布】

東京湾以南に分布。紀伊半島、四国(土佐清水)、山口湾周辺の干潟。福岡、佐賀にも生息している。

【世界の分布】

台湾、中国。

【生息地の環境／生態的特性】

河口・ヨシ原周辺の石・漂着物の下の湿り気のある場所に生息する。半分位土にうずもれているので発見しにくい。指で触っても動かない。小動物を捕食する。

【現在の生息状況／減少の要因】

河口開発が進み、干潟・ヨシ原が減少したため生息場所が減少し、個体数の減少となった。

【保全上の留意点】

河川全域と河口域の自然環境の維持・管理が必要。個体数が減少しているので現在の生活場所を保護する必要もある。

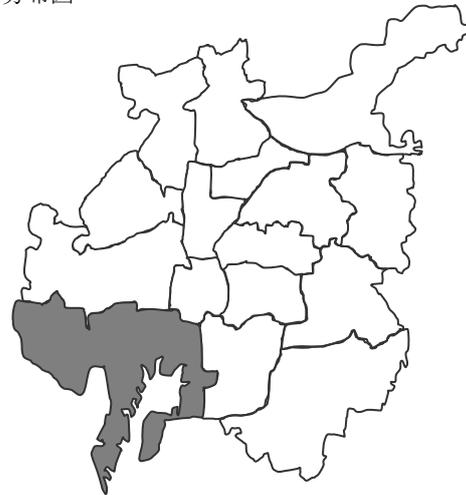
【関連文献】

天野 勲, 2010. 生物から見た名古屋の自然, p.98. 名古屋市.
 天野 勲, 2010. レッドデータブックなごや2010 -2004年版補遺-, p.179. 名古屋市.
 市川市・東邦大(編), 2007. 干潟ウォッチングフィールドガイド, pp.37,136. 誠文堂新光社, 東京.
 中島徳男, 1997. 三河湾・遠州灘産海産蟹類目録, p.32.
 大阪市立自然史博物館・大阪自然史センター(編), 2008. 干潟を考える 干潟を遊ぶ, p.91. 東海大学出版, 秦野.
 酒井 恒, 1976. 日本産蟹類, pp.419-420. 講談社, 東京.
 和田恵次, 2000. 干潟の自然史・砂と泥に生きる動物たち, pp. 158-162. 京都大学学術出版会, 京都.



ウモレベンケイガニ
 港区庄内川河口背割堤ヨシ原、2009年6月10日
 天野 勲 撮影

市内分布図



(執筆者 天野 勲)

カニ類

カニ類 <十脚目 ヘイケガニ科>

サメハダヘイケガニ *Paradorippe granulata* (De Haan)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	調査対象外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

伊勢湾の知多半島沿岸に多く生息しているカニで、近年、減少傾向にある。水質や海底の汚れの影響を受け易い沿岸の砂泥底に生息していることから、減少しているものと思われる。名古屋港南部の潮見ふ頭・金城ふ頭南海岸の海底に生息しているが、年々減少している。ふ頭海岸は、船舶の出入りが多い事から、海水・海底の汚れが減少の原因ではないかと思われる。

【形態】

雄の甲長 24mm 位、甲幅 25mm 位、人の顔に似た甲面は、小さな顆粒に覆われ、さめ肌になっている。四対の歩脚のうち、前方の2対は長く、歩いたり泳いだりするが、後方の2対は縮小して、その先端の爪で二枚貝の殻などを背中のにのせて歩く、変わった形態・習性をもつ。

【分布の概要】

【市内の分布】

伊勢湾北部エリア内の埋め立て地である名古屋港の潮見・金城ふ頭南海岸の海底に生息する。

【県内の分布】

伊勢湾の知多半島側に特に多く分布。三河湾・遠州灘にも分布している。減少傾向にある。

【国内の分布】

北海道南部から九州までの両沿岸に分布している。

【世界の分布】

韓国、中国、台湾。

【生息地の環境／生態的特性】

伊勢湾には、古くから見られるカニ。水深 10～150m の砂泥底で貝殻の多い場所に生息する。抱卵盛期 7月から 9月で、繁殖時期になると砂底の場所を求めて、活発に移動する。冬になると深い場所に戻る。

【現在の生息状況／減少の要因】

水質や海底の汚れの影響を受けやすい沿岸の砂泥底に生息していることから、減少傾向にあると思われる。特に名古屋港ふ頭付近の海底は、大型船舶の出入りが多く、水質や海底の環境悪化が進んでいると考えられる。

【保全上の留意点】

清掃活動などにより、ゴミ、油の回収をし、海・港の水質浄化回復をしていくことが必要である。

【特記事項】

相模湾では、サメハダヘイケガニが激減している（池田ほか、2006）。
名古屋港一帯の埋立地（ふ頭）でサメハダヘイケガニの化石が採集された。

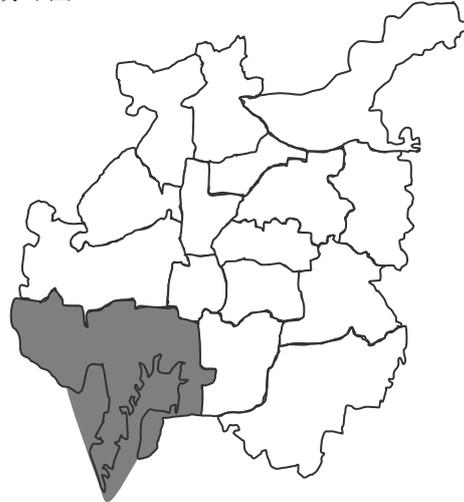
【関連文献】

- 天野 勲, 2010. レッドデータブックなごや 2010 -2004年版補遺-, p.180. 名古屋市.
- 天野 勲, 2008. 甲殻類. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.337-342. 名古屋市.
- 池田 等ほか, 2006. 相模湾葉山沖の短尾類相. 国立科学博物館専報, (41):173-182.
- 三輪龍之, 1977. 郷土の化石と貝 -名古屋港及びその周辺を中心として-, pp.24-25.
- 中島徳男, 1992. 愛知県三谷港に水揚げされたカニ類の目録とその分布, pp.35-45. 三河生物同好会.
- 水産庁 (編), 1998. 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック, (社)日本水産資源保護協会, 東京.
- 富山 実, 1993. 小型底びき網漁から見た伊勢湾内底生生物相. 愛知水試研報, (1):41-47.



サメハダヘイケガニ
港区潮見ふ頭南海岸、2001年9月5日、天野 勲 撮影

市内分布図



(執筆者 天野 勲)

カニ類 <十脚目 イワガニ科>

モクズガニ *Eriocheir japonicus* (De Haan)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	調査対象外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

生活史の大部分を淡水域で生息するが産卵のため海（河口）に降りる。幼生期は河口で生育し、稚ガニから、親ガニになると川を遡上する回遊性のカニである。庄内川では、上流・支流に広く生息している。

天白川では、河口の自然環境が悪化し生息が困難となっており、個体数が減少している。河口の干潟・ヨシ原の減少・水質の変化が原因と考えられる。市街を流れる堀川・山崎川の上流域にモクズガニの生息が確認されている。両川の水質が、ある程度改善されたことによるものと考えられる。全国的に食用に供されるカニであり、近年、生息環境悪化などにより、減少が指摘されている。

【形態】

雄の甲長 50mm 位、甲幅 80mm 位に達する淡水最大のカニ。鋏脚掌部の外面は軟毛でおおわれ、雄は雌より著しい。甲の側縁に 3 歯がある。チュウゴクモクズガニは日本のモクズガニに比べ、甲がやや凸凹で脚が細長い。脚の爪は細く尖っている。甲の側縁に 4 歯がある。



モクズガニ
中川区新川下流、1999年5月16日、天野 勲 撮影

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川のかなり上流と矢田川など支流に多く分布している。天白川では減少傾向にある。

【県内の分布】

伊勢湾東側にある知多半島の各河川や三河湾に流れ込む矢作川・豊川などの上流にまで分布している。

【国内の分布】

北海道以南、本州、四国、九州、沖縄まで分布。小笠原のモクズガニは別種。

【世界の分布】

サハリン、韓国、台湾。

【生息地の環境／生態的特性】

成体は各地の河川に生息する。年間通し放卵するが、抱卵盛期は9月から翌年6月、特に9月から10月は、海（河口）に降り放卵する数が多い。（12月放卵するカニは5月上旬に川を上がる。冬、淡水で越冬するカニは、5月上旬川を降りる。）

【現在の生息状況／減少の要因】

水質汚濁に強いが、水質の富栄養化が進むと生息困難となる。河口の干潟・ヨシ原の環境が悪化すると個体数が減少する。

【保全上の留意点】

庄内川の途中に堰や横断構造物を建設しない。また、河川全域と河口の自然環境を維持・管理していくことが必要である。

【特記事項】

9月に海に降りる親ガニをトラップを仕掛けて捕獲し食用にしている。肺吸虫の中間宿主として有名。2014年4月に庄内川の最も下流にある堰堤に階段状の魚道ができた。モクズガニの通過が容易になった。

【関連文献】

天野 勲, 2010. レッドデータブックなごや2010 -2004年版補遺-, p.181. 名古屋市.
 天野 勲, 2008. 甲殻類(カニ類). 新修名古屋市史資料編 自然, pp.340-341. 名古屋市.
 岡本一利, 2004. モクズガニの種苗生産の現状. 日本甲殻類学会第42回大会報, p.14.
 小林 哲, 2014. モクズガニの形態の変異と奇形. *CANCER*, (23):36.
 水産庁(編), 1998. 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック. (社)日本水産資源保護協会.
 渡辺精一ほか, 2006. モクズガニの種内分化. *CANCER*, (15):9-12.
 渡辺精一ほか, 2007. モクズガニ異所的集団の遺伝的分化. 日本甲殻類学会第42回大会報, p.13.
 山崎いづみほか, 2006. モクズガニ属カニ類の遺伝的類縁関係. 日本甲殻類学会第42回大会報, p.59.

(執筆者 天野 勲)



カニ類

カニ類 <十脚目 スナガニ科>

コメツキガニ *Scopimera globosa* De Haan

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	調査対象外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

干潟では普通種であるが、個体数が減少している。かつて、庄内川・天白川の河口には広い干潟があり、砂底干潟にはコメツキガニの大きい集団が見られた。河口ふ頭ができ、干潟の面積が狭くなり、個体数が減少した。庄内川河口に稲永ふ頭（空見ふ頭）がつくられ、干潟が狭くなった。残された砂底干潟でコメツキガニの集団が観察できる。しかし川により運ばれる土砂量が減少したり、水質が変化すると更に減少が懸念される。天白川河口には、潮見ふ頭がつくられ、河口干潟は狭くなった。上・中流の丘陵地の森林がなくなり、池が埋まり、住宅団地となった。河口に運ばれる土砂量が減少し、水質も汚濁し、個体数が激減した。

【形態】

雄は甲長7mm位、甲幅9mm位の小型のカニ。鋏脚は左右同じ大きさ。指部は内側に曲がりスプーン状である。鋏脚・歩脚の長節に鼓膜がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川河口砂底干潟に多く分布している。天白川の河口干潟は、河口の自然環境が悪くカニの個体数が減少している。

【県内の分布】

知多半島伊勢湾側内海の干潟に分布している。三河湾に流れこむ河川、矢作川、豊川、汐川などの河口干潟、一色海岸の干潟にも分布している。

【国内の分布】

北海道から九州、沖縄、八重山まで分布。

【世界の分布】

台湾、韓国の沿岸。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾や河口の砂底干潟に群生する。干潮時に摂食活動が見られる。干潟の表面に繁殖するケイ藻類を砂土とともに鋏脚ですくって口に入れ、砂土を団子にして外に捨てる。抱卵盛期は6月から7月。

【現在の生息状況／減少の要因】

天白川河口干潟は砂底干潟やヨシ原が減少し、コメツキガニは激減した。

【保全上の留意点】

庄内川河口の砂底干潟が現状のままに存続するためには、河口に運ばれる土砂が減少しないことである。そのためには、河川の途中に横断構造物を建設しないことが必要となる。

【関連文献】

- 天野 勲, 2010. レッドデータブックなごや2010 -2004年版補遺-, p.182. 名古屋市.
 天野 勲, 2008. 代表的な自然環境と生物・庄内川河口. 新修名古屋市史 資料編 自然, pp.496-497. 名古屋市.
 嶺井久勝ほか, 1992. 週刊朝日百科 動物たちの地球 69 無脊椎動物 9 サワガニ・コメツキガニほか, pp.270-271. 朝日新聞社, 東京.
 和田恵次, 2000. 干潟の自然史・砂と泥に生きる動物たち, pp. 21,23,58-59,98. 京都大学学術出版会, 京都.



コメツキガニ
 港区庄内川河口干潟、2005年7月22日、天野 勲 撮影

市内分布図



(執筆者 天野 勲)

カニ類 <十脚目 スナガニ科>

チゴガニ *Ilyoplax pusilla* (De Haan)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	調査対象外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

干潟では普通種であるが、個体数が減少している。かつて、庄内川・天白川に広い河口干潟があり、砂泥底干潟には、チゴガニの大きい集団を見ることが出来た。両河川の河口にふ頭ができ、個体数が激減した。庄内川河口干潟には、幾つかの集団を観察することができる。天白川河口干潟に生息するチゴガニの個体数は少ない。河口の自然環境悪化が進めば、消滅すると考えられる。

【形態】

雄の甲長6mm位、甲幅9mm位で、甲は横長で、六角形の小型のカニ。鋏脚は左右同大。鋏脚の長脚に鼓膜を有する。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川と天白川の河口砂泥底干潟に分布している。

【県内の分布】

知多半島南知多町内海川の河口干潟に分布。三河湾に流入する矢作川、豊川、汐川の河口干潟と一色海岸の干潟にも分布している。

【国内の分布】

東京湾から九州沿岸まで分布。近年、宮城県まで分布していることが分かった（生息範囲は狭い）。

【世界の分布】

韓国の沿岸。

【生息地の環境／生態的特性】

河口の砂泥底干潟に生息する。干潮時には砂泥底上のケイ藻類を砂とともに摂取し、砂団子にして出す。抱卵盛期は6月から7月。

【現在の生息状況／減少の要因】

河川環境が悪化し、河口の砂泥底干潟やヨシ原が減少するとチゴガニは産卵・稚ガニの生育ができなくなり、個体数が減少する。

【保全上の留意点】

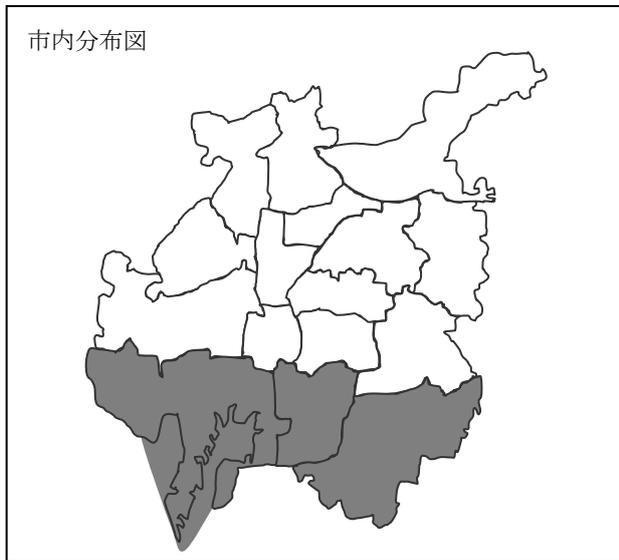
河川の途中に横断構造物ができると、川水が運んでくる土砂量が少なくなり砂泥干潟やヨシ原が減少する。庄内川河口の環境保全が必要である。

【関連文献】

天野 勲, 2010. レッドデータブックなごや2010 -2004年版補遺-, p.183. 名古屋市.
 天野 勲, 2008. 代表的な自然環境と生物2・庄内川河口. 新修名古屋市史資料編 自然, pp.496-497. 名古屋市.
 嶺井久勝ほか, 1992. 週刊朝日百科 動物たちの地球 69 無脊椎動物 9 サワガニ・コメツキガニほか, pp.270-271. 朝日新聞社, 東京.
 和田恵次, 2000. 干潟の自然史・砂と泥に生きる動物たち, pp. 21,22,58-59,93-95. 京都大学学術出版会, 京都.



チゴガニ
港区庄内川河口干潟、2005年7月22日、天野 勲 撮影



市内分布図

カニ類

(執筆者 天野 勲)

